

包正華白林

包  
山  
茅  
田  
文

文藝春秋新社

包む



昭和三十一年十二月二十日 初版  
昭和三十三年四月三十日 六版

定價 二九〇圓

著者 幸田 文

發行者 車谷 弘

印刷者 田中末吉

發行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四  
振替口座東京七八七四三番

萬一落丁亂丁の際は、お買求の書店  
又は發行所にてお取換致します

本文印刷 理想社  
色刷 中七堂  
製本 島

目次

小猫

七

鹿のお湯

一〇

廢園

一五

道ばた

三三

むしん

三三

菓子

三六

蜜柑の花まで

四四

風の記憶

五三

夾竹桃

六〇

身にしみる日

六六

金魚

鱸

\*

格子

紹介状

静か

ふたつボン

道のメモ

包む

きれいなひと

雨のおとづれ

結婚雑談

七

七

全

全

二〇

二四

二四

二五

二六

二六

二七

晩秋夜話

二八

枇杷の花

二九

\*

歩く

三〇

ごみ

三一

ち

三二

似る

三三

花

三四

山菜

三五

あとがき

三六

寫眞撮影 濱谷 浩



包

打





## 小 猫

小猫を二匹もらつた。うしろ姿では見わけのつかないくらゐよく似た二匹で、相當いたづらをするし、しつこくもじやれるが、何をしてゐても猫特有のかはいゝ恰好をしてゐる。けれども二匹には明らかな相違があつて、片方は器量好しで眼がまるく毛並がよく、人なつこい。片方は鼻がとんがつて眼がつりあがつて毛が薄くて、人が手を出すと唸り聲をあげて物の下へ逃げこむ。器量好しは一日中かはいがられて手から手へ渡つてゐるし、一方は本箱の脇などにぼつんとすわつて、なかまがかはいがられるのをじつと見てゐる。そのうち、もつと悪いことを發見した。下性げしやうがよくないのだ。砂の箱があてがつてあつても、庭で遊んでゐても、わざ／＼家のなかへ來ておしつこをする。これではいよく誰にも愛されない。

私も困るやつだと大ぶ嫌ひかけて、ふと、なぜわざ／＼家のなかへ来てするのだらうか、そこに解せないものがある、と氣がついた。氣をつけてみると、彼はあわてゝ座敷のなかへ駆けこんで来て、哀しげな小聲で啼きながら落ちつきなく、あちこちを捜しまはるふうにうろつき、遂にどこへでもしやがんでしまふのだつた。あはれなものがからだ中に表現されてゐた。私は母を捜してゐるのだと直感し、娘を近處の獸醫師へ相談にやつた。

「一體にからだの弱い猫が、ことにおなか具合の悪いときに、さういふ粗相をするのだ」さうで、薬をもらつて來た。「もと／＼弱く生れついてゐるんだから、手をかけてかはいがつて育てゝやつてくたさいつて。先生の經驗から云ふと、こんなに眼がつりあがつて不器量なもの、性質のたけ／＼しいのも、手をかけてやると治るんだつていふ話なの。ねえ、うちの人もよそから來る人も、みんなあつちばかりかはいがり過ぎてゐたわねえ。」娘は申しわけなさうに、そうつと云つた。

たかゞ猫のことだと云つてしまへばそれまでだが、平等にしようと思がけるのは、正直に云つてむづかしかつた。が、猫は先生の云つた通り、つりあがつた眼もとが柔かく圓くなつてきたし、人を信賴するやうになつてきてゐる。兩脚をきちんとすわつて人の顔を見あげてゐるとき、彼は障子を明けてもらひたい、水が飲みたい。こちらでも彼の望みがわ

かる。二匹の差はいま殆どないやうに育つてゐる。その、もう年輩の先生は「よくなりましたね」と褒めてくれた。

むかし私は不器量でとげ／＼しい氣もちの、誰からも愛されない子だつた。そして始終つまらなかつた。それがこたへてゐたので、三十、四十の後になつても大勢子供がゐれば、きつとすねつ子、ひがみつ子、不器量つ子のそばへ行つて對手あひてになつてやる氣もちなのは、うそではなかつた。けれども猫ではこの始末であつた。子供るときからの、長い、あはれなもの弱いものに寄せる心ではあつたが、それも結局は、いゝ加減な中途半端なものだつたとしか思へない。そりやさうな筈だ、愛されない恨みのうへに根を下して辛うじて——さう、ほんとに辛うじてだ——もつた愛情などは、しよせん平等なおほらかな愛とは云へないのだ。だめだなあと嘆息しながら、何十年の經て來た時間を考へる。

## 鹿のお湯

そこは、むかし鹿が教へたお湯なのだといふ山のなかの温泉へ、夏の末から出かけてしばらく行つてゐたことがあつた。どつちを向いても山ばかり、袋のどんじり、みたよなところで、たつた一ツの出入口は細い谷川に沿つた狭いうね／＼道で、辛うじて里へ導かれてゐた。とは云へ、温泉には無論旅館もあり別荘もあり、バスはひけてゐるし、ラヂオも高と鳴りたてゝゐる。一泊の旅の人ならこゝも都會人の幅を利かす湯とうけとつて歸るだらうが、すこし長くゐてみると、やつぱりこゝは鹿の教へたお湯だなあ、鹿は都會人ではなくこの土地の人にこのお湯を贈つたのだなと考へられる湯處なり湯なりである。

ちつとも目立たないじみなやりかたで近在の人が、しごとの暇を見ては氣ばらしに來てゐる。帳場で聽けば、かういふお客さんは一年中、といつても冬は雪で道がだめになるけ

れど、春夏秋いつでもぼつり／＼と絶えず來てゐるといふ。お客さんは概してとしよりだが、ちいさんだけ、ばあさんだけのことより、ちとばと混合のほうが多いと云ふ。若いものは、こんな生ぬるい湯にのろ／＼出たりはひつたりしてゐられるかと云つて、みんな汽車で三時間もする縣の都會へ出かけてしまふ。そこには鹿の教へたぬるいお湯なんかないかはり、人の摩擦で發達した騒々しい文明があつて、それは若ものにまことに魅力的である。

朝東京をたつて午後遅くそこへ著くと、夏から秋へ一ト汽車で乗りつけたといふ感じがある。季節の移りが濁つてあいまいな東京から行くと、はつきりした季節感が満ちてゐる土地は嬉しい。その點かへつて東京人のはうが季を見るに敏なる眼をもつてゐるのかもしれない。一日一日秋が濃くなるのも、日の出日の入りが二三分づゝ縮まつてくるのも鮮やかにわかる。雨が降つたりするといつそうそれがくつきりする。降るまへと降つたあとの道はそこいらちゆうにふんだんである。雨後の陽に透かせば潤葉樹の葉は一トきは明るく、それは黄葉の準備だらうし、松蟲草の花は一度にぐつと小さく、二度咲の桔梗はあはれに紫が深まる、それは夏のなごりを惜しむといふより早く夏を盡してしまひたいと、咲き急いでゐるやうに見える。

滞在の終りごろは、あいにくと雨がつゞいた。空氣とお湯はどん／＼溫度を落し、谷川は水勢と瀬音を増した。現金に客はへつて、宿はがらんとしてしまつた。私は貸ゆかたの重ね著をして、あまり風呂へもはひらず、いよ／＼寛いで、對岸の山と細道の雨の色を飽かず見てゐた。すると、そのしと／＼降りるなかを十何人のぢゞばゞが行列になつてのぼつて來た。刈入れまへの一ト休みで、雨の降つてゐるのこそ上々のお休み天氣だといふ。お百姓といふものは、むかしからこんななぢゞばゞ中よく湯治場へ來るものか、それともこれもアメリカ風になつたのかななどと、こちらはくだらない思案をしてゐるうちに、暮れてきて、あちらは廣間で賑やかな會食がはじまつたらしい。とき／＼拍手が聞え、拍手はやがて音頭取りの手拍子にかはり、鄙歌ひなうたのソロや合唱がはじまつた。

今夜は一トきは瀬音がはげしい。雨戸を締めると、かへつて音がこもりでもするのか。「水、激す」といふのが誇張のことばではなくて實感だとおもふ。ひろくもない川なのに、岩へ衝きあたる水が／＼と響いて、そのうへ半町ほど下手には堰があるので、間斷なくどうつと地鳴りのやうにも鳴つてゐる。それだのに古い板屋根へ降る雨がしと／＼と、樋のない廂から落ちる雨がぼと／＼と、これもしかと聞えてゐる。歌ははつきりしたり消えたり、手拍子は合つたり亂れたり、瀬の水は高くあら／＼かに、しかし遠く、檐のきの雨だれ

はかすかにしみ／＼と、しかも滴々<sup>たぎ</sup>と打つてゐる。そして私自身はといへば、自分の息さへも聞えないくらい平安である。もう寝るほかにすることはない。結構な身分である。気がゝりは何一ツないのんびりした時間である。だのに——だか、だから——だか、よくわからぬが、こゝ數日離れてゐた家事雑用が急になつかしいものにうかんだ。

脇息に眼が行つた。肘かけのところはこぼが破れて、綿をはみ出してゐる。つぎ切も糸針もなし、東京の針箱にあるはずの小切<sup>くぎれ</sup>を頭に描いて繕ひをおもふのが、いかにも旅の宿である。くだらないと知りつゝ脇息をあつちへ向けこつちへまはし、するうちは、ずみで向うへひつくりかへつて、ばくと腕木の部分が口をあいて離れた。

脇息の腕木は古びてせしめが甘くなるとまゝ外<sup>はら</sup>れることがあるから、氣にもせず、はめなほさうと手に取ると、ふと氣がつけば常には陽にさらされてゐない腕木の裏のその眞新しい木肌に、何かぎつしり書いてある。

「自分は復員であります」と書きだして、「こゝへ来て二晩とも雨が降つてゐる、復員以來二年にもなるが、折角歸つて來ても兄弟とも親類ともいやなことばかりで、あくせくし通した」とあり、こゝへ來たのも最後の口論のあとらしく、それでもさすがに人の名は××に伏せて悪口不満が書きたてゝあり、「自分はもうほか土地へ行つてしまふつもりだ」



と終つてゐる。鉛筆でねつちりと木に書きつけたのだから、一個所消しのところは木目が凹むまでぐいと棒が引いてある。ほんたうだらうか、創作だらうか。

ちゞばゞの宴會は終つて、今度は各部屋へ田舎節のソロが引越してゐる。私は睡れない。どうつ、ごんく、しとく、ぼたくがうるさい。鹿のお湯が氣に入つて、ちと休憩が長すぎた。危く無爲になりかけてゐたとおもふ。

翌朝、蟬の羽のやうな薄ものをみすぼらしく濡らして、つめたい高原の秋雨へ別れた。東京の夏はされてゐた。